

# 北海道で響いたアフガン女性の声

清 末 愛 砂

今年の六月上旬、アフガニスタンから女性活動家Sが来日した。二八歳の彼女は、一九七七年に創設されたRAWA（アフガニスタン女性革命協会）の若いメンバーである。RAWAは、アフガニスタン初の独立系のフェミニストの政治団体であり、世界的にも（「闘うアフガン女性たち」として評価され、昔から知られている）。

アフガニスタンでは、二〇二〇年八月のタリバーンの復権にともない、多数のNGO関係者や前政権関係者、知識人等が海外へ退避したが、RAWAは組織としてあえて国内に残るという選択をした。復権から約三年、RAWAのメンバーは大きな危険がともなうなかで、粘り強く女性の権利や自由を求める抗議活動が続けるとともに、小学校・女子のための地下学校（タリバーンの支配下で七年生以上の女子は教育を受けることができない）・女性の識字教室の運営のほか、自然災害の被災地への移動クリニックの派遣を含む貧困や災害で苦しむ人々のための人道支援活動等に励んできた。

このたびの招聘は、筆者が共同代表を務める「RAWAと連帯する会」が設立二〇周年

を記念し、RAWA来日スピーキングツアーを実施するためになされた。同会は主に、RAWAがアフガニスタン東部で運営する小学校の財政支援を行っている。筆者は来日の翌日に大阪でSに再会した。彼女は元々のシャイな性格に加え、幼い頃に数年滞在したことがあるパキスタン以外の外国への訪問は初めてであることの緊張もあり、少し戸惑ったような笑顔で立っていた。しかも、これから各地で講演をしていくのだ。緊張しないはずがない。通訳を務める私はその姿を見ながら、単純に通訳をするのではなく、最大限寄り添いながら、ペアとして伴走するのだと誓った。

タリバーンの復権以前に公立学校の教師をしていたSには、広島、京都、大阪、名古屋、長野、北海道（室蘭と札幌）、東京で開催された市民向けの講演会、高校や大学（筆者の職場である室蘭工業大学を含む）の授業や研究会・懇談会等で、女性と子どもとの視点からアフガニスタンの現状を話してもらった。北海道には筆者の職場があるだけでなく、人間関係のつながりがあるため、RAWAと連帯する会の会員が多い。また、北海道パレスチナ医療奉仕団とは以前から連携してきた経緯

があることから、講演会を共催しやすい。その影響もあってか、札幌講演には、会場から人が溢れ出るほどの参加者が押し寄せた。

Sは、社会のジェンダー規範や抑圧にリアルに直面した経験を含む、一人の女性としてのライフヒストリーの一部を冒頭で話すことで、非常に多くの聴衆の心をつかんでいった。一つの講演が終わるたびにパワーアップし、自信をつけていった。多数の参加者が自分の話に真剣に耳を傾けていることを目にし、自分たちの闘いがけっして孤立していないことを実感したのだという。Sも私も講演中にときどき涙を流し、互いに励ましあった。

RAWAは若手のメンバーを海外に派遣することが多い。それは、活動の継続のために次世代を育てていくためである。RAWAと連帯する会のような海外の連携団体は、その点をきちんと理解したうえで、海外講演を通してRAWAのメンバーの成長を手助けする役割を担うことも期待されている。RAWAと連帯する会の目的は、RAWAの事業の単なる支援ではなく、「連帯」を求めることにあるが、こうした役割を最大限果たすことも連帯活動の一部なのである。すべての講演の最後にSは言った。「皆さんの連帯は、私たちにとって世界を意味するのです」と。連帯を求める声は、今後も北海道に響き続けていくのか。筆者は響きの継続に向けて、北海道で活動を続けていく。

▲きよすえ あいさ・室蘭工業大学大学院工学研究科教授V